茨城県教育財団文化財調査報告第142集

一般県道赤浜谷田部線県単道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

高須賀中台遺跡

作業室用

平成10年11月

茨城県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第142集

一般県道赤浜谷田部線県単道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

高須賀中台遺跡（たかすがなかだい）

平成10年11月

茨城県
財団法人　茨城県教育財団

序

茨城県は，長期的な展望のもとに，産業・経済の発展に伴う広域流通機構の整備と，県土の普遍的な発展を図るために，県内の交通体系の整備を進めております。

一般県道赤浜谷田部線道路改良工事は，その一環として計画されたもので，その予定地内には，多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されています。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県から埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け，一般県道赤浜谷田部線道路改良工事地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

本書は，高須賀中台遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより，郷土の歴史の理解を深めると共に，教育，文化の向上の一助として広く活用されますことを希望いたします。

なお，発掘調査及び整理作業を進めるにあたり，委託者である茨城県から賜りました多大なるご協力に対し，深く感謝申し上げます。

また，茨城県教育委員会，つくば市教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位から御指導，御協力を賜りましたことに対し，衷心より感謝の意を表します。

平成10年11月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　橋　本　　昌

例　　言

1　本書は，茨城県の委託により，財団法人茨城県教育財団が，平成９年９月に発掘調査を実施した茨城県つくば市に所在する高須賀中台遺跡の発掘調査報告書である。

なお，高須賀中台遺跡の所在地は次のとおりである。

高須賀中台遺跡　茨城県つくば市大字高須賀字中台491番地の１ほか

2　高須賀中台遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長		橋本　昌	平成７年４月 ～
副理事長		中島弘光	平成７年４月 ～
		齋藤佳郎	平成８年４月 ～ 平成10年３月
		川俣勝慶	平成10年４月 ～
常務理事		齋藤紀彦	平成９年４月
事務局長		西村敏一	平成９年４月 ～
埋蔵文化財部長		沼田文夫	平成８年４月 ～
埋蔵文化財部長代理		河野佑司	平成６年４月 ～
企画管理課	課長	河崎孝典	平成９年４月 ～ 平成10年３月
	課長	鈴木三郎	平成10年４月 ～
	課長代理	根本達夫	平成６年４月 ～
	課長代理	清水　薫	平成９年４月 ～ 平成10年３月（平成８年４月 ～ 平成９年３月係長）
	主任調査員	小高五十二	平成８年４月 ～ 平成10年３月
	主任調査員	池田晃一	平成10年４月 ～
	主任	川崎教史	平成10年４月 ～（平成10年４月～平成10年９月主事）
経理課	課長	鈴木三郎	平成９年４月 ～ 平成10年３月
	課長	佐藤　健	平成10年４月 ～
	主査	田所多佳男	平成８年４月 ～
	課長代理	清水　薫	平成10年４月 ～
	主任	小池　孝	平成７年４月 ～ 平成10年３月
	主任	宮本　勉	平成９年４月 ～
	主任	木下光保	平成10年４月 ～
	主事	小西孝典	平成９年４月 ～ 平成10年３月
調査一課	課長(部長兼務)	沼田文夫	平成８年４月 ～
	調査第３班長	海老澤　稔	平成９年４月 ～ 平成10年３月
	主任調査員	小林　孝	平成９年９月調査
	主任調査員	川村満博	平成９年９月調査
整理課	課長	川井正一	平成10年４月 ～
	主任調査員	茂木悦男	平成10年10月 ～ 平成10年11月整理・執筆・編集

3　本書に使用した記号等については，凡例を参照されたい。

4　発掘調査及び整理に際して，御指導，御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

5　遺跡の概略

フリガナ	イッパンケンドウアカハマヤ タ ベ センケンタンドウロカイリョウジギョウ ニトモナウマイゾウブン カ ザイチョウサホウコクショ
書名	一般県道赤浜谷田部線県単道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
副書名	高須賀中台遺跡
巻次	
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第142集
編著者名	茂木　悦男
編集機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310-0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　　TEL 029(225)6587
発行機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310-0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　　TEL 029(225)6587
発行年月日	1998（平成10）年11月30日

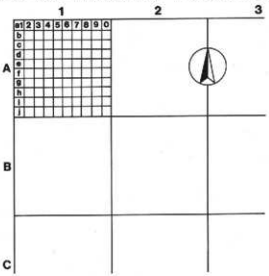
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
たかすかなかだいいせき 高須賀中台遺跡	いばらきけん つくばし 茨城県つくば市 おおあざたかすかあざなかだい 大字高須賀中台 491番地の1ほか	08220 — 69	36度 4分 2秒	140度 1分 2秒	19970901 ～ 19970930	491㎡	一般県道赤浜谷田部線県単道路改良事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高須賀中台遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡　1軒 土坑　1基	縄文土器片（縄文時代前期）	縄文時代から古墳時代前期にかけての集落跡。
		古墳時代	竪穴住居跡　2軒	土師器（器台・坩・壺・台付甕・甕・小形甕）	
		時期不明	溝　5条 土坑　1基	土師器片，縄文土器片，石鏃	

凡　　例

1　遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第IX系座標を原点とし，X軸＝＋7,580m，Y軸＝＋16,470mの交点を基準点とした。大調査区は，この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西，南北に各々10等分し，4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA，B，C・・・，西から東へ1，2，3・・・とし，その組み合わせで「A1区」「B2区」のように呼称した。さらに，小調査区も同様に北から南へa，b，c・・・j，西から東へ1，2，3・・・0と小文字を付し，名称は，大調査区の名称を冠し，「A1 a_1区」，「B2b_2区」のように呼称した。（第1図）



第1図　調査区呼称方法概念図

2　遺構，遺物，土層に使用した記号は，次のとおりである。

遺構　住居跡－SI　土坑－SK　溝－SD

遺物　土器－P　石製品－Q　拓本土器－TP

土層　撹乱－K

3　遺構及び遺物の実測図中の表示

＝炉　＝焼土・赤彩　＝繊維（断面）　＝硬化面　● ＝土器

4　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

5　遺構・遺物実測図の作成方法と掲載方法については，以下のとおりである。

(1)　遺跡全体図は縮尺400分の1とし，各遺構の実測図は，60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

(2)　遺物は，原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり，それらについては個々に縮尺のスケールをつけて表示した。

(3)　「主軸方向」は，炉を通る軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とし，その主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。（例　N－10°－E　N－10°－W）

(4)　遺構の規模や遺物の計測値について，現存値は（　）で，推定値は〔　〕を付して示した。

(5)　遺物の計測値は，A－口径　B－器高　C－底径　D－高台（脚）径　E－高台（脚）高　とし，単位はcmである。

(6)　遺物観察表の備考の欄は，実測（P）番号，土器の現存率，出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。

目　　次

序
例言
凡例
第１章　調査経緯……1
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査経過……1
第２章　位置と環境……2
　第１節　地理的環境……2
　第２節　歴史的環境……2
第３章　高須賀中台遺跡……7
　第１節　遺跡の概要……7
　第２節　基本層序……7
　第３節　遺構と遺物……9
　　1　竪穴住居跡……9
　　2　溝……17
　　3　土坑……19
　　4　遺構外出土遺物……21
　第４節　まとめ……23

挿　図　目　次

第１図　調査区呼称方法概念図
第２図　高須賀中台遺跡周辺遺跡分布図 …… 5
第３図　高須賀中台遺跡遺構全体図 …… 6
第４図　基本土層図 …… 7
第５図　高須賀中台遺跡調査区設定図 …… 8
第６図　第１号住居跡実測図 …… 9
第７図　第１号住居跡出土遺物実測図(1) ……10
第８図　第１号住居跡出土遺物実測図(2) ……11
第９図　第２号住居跡実測図 ……13
第10図　第２号住居跡出土遺物実測図 ……15
第11図　第３号住居跡実測図 ……16
第12図　第３号住居跡出土遺物拓影図 ……16
第13図　第１号溝実測図 ……17
第14図　第２号溝実測図 ……18
第15図　第３号溝実測図 ……18
第16図　第５号溝実測図 ……19
第17図　第１号土坑・出土遺物実測図 ……20
第18図　第２号土坑実測図 ……20
第19図　第２号土坑・出土遺物拓影図 ……21
第20図　遺構外出土遺物実測図 ……21

表　目　次

表１　高須賀中台遺跡周辺遺跡一覧表 …… 4
表２　高須賀中台遺跡住居跡一覧表 ……17
表３　高須賀中台遺跡溝一覧表 ……19
表４　高須賀中台遺跡土坑一覧表 ……21

写真図版目次

ＰＬ１　北部完掘状況。第１号住居跡，第１号住居跡遺物出土状況
ＰＬ２　第１号住居跡遺物出土状況。第２号住居跡
ＰＬ３　第２号住居跡遺物出土状況
ＰＬ４　第３号住居跡遺物出土状況。第３号住居跡炉Ａ・Ｂ
ＰＬ５　第１号溝，第１号土坑，第２号土坑
ＰＬ６　第１号住居跡出土遺物
ＰＬ７　第１・２号住居跡出土遺物
ＰＬ８　第３号住居跡・第１・２号土坑・遺構外出土遺物

第1章　調査経緯

第1節　調査に至る経過

一般県道赤浜谷田部線は，明野町赤浜地区とつくば市谷田部地区とを南北に結ぶ道路であるが，沿線地域の発展は交通量の増加を招き，茨城県はその解消と交通安全の確保を目的として道路の改良工事を計画した。

これにより平成7年10月25日，茨城県土浦土木事務所からつくば市教育委員会あてに，一般県道赤浜谷田部線道路改良事業予定地内の埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会があった。平成7年11月15日つくば市教育委員会から茨城県教育委員会あてに，一般県道赤浜谷田部線道路改良事業予定地内の埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて進達があった。

そこで，茨城県教育委員会は平成8年1月23日現地踏査，同年9月25日試掘調査を実施した。その結果，同年10月28日，茨城県教育委員会は茨城県土浦土木事務所あてに，つくば市高須賀地内の道路改良事業予定地内に「高須賀中台遺跡」が所在する旨回答した。

平成9年2月20日，茨城県土木部から茨城県教育委員会あてに，「高須賀中台遺跡」の取り扱いについて協議があった。同年3月17日，茨城県教育委員会は茨城県土木部あてに，「高須賀中台遺跡」の取り扱いについて，記録保存をする旨回答し，調査機関として茨城県教育財団を紹介した。

茨城県教育財団は茨城県土木部と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び，平成9年9月1日から同年9月30日にかけて「高須賀中台遺跡」の発掘調査を実施することとなった。

第2節　調査経過

高須賀中台遺跡の発掘調査は，平成9年9月1月から平成9年9月30日までの1か月間で実施した。以下，調査の経過についてその概要を記述する。

9月上旬　発掘器材の搬入等発掘調査のための準備をし，2日から遺構確認作業を行った。その結果，竪穴住居跡3軒，土坑2基，溝5条を確認した。3日，遺構確認状況の写真撮影後，遺構の掘り込みを開始した。面積が狭いこともあり，竪穴住居跡，土坑，溝は併行して掘り込みを進めることにした。

中旬　上旬に降雨のため2日ほど現場作業が中止になったが，10日にすべての竪穴住居跡の遺物出土状況の写真撮影を行い，11日から遺物出土状況の実測図を作成した。18日には第1・3号住居跡の完掘状況の写真撮影をし，実測図を作成した。

下旬　22日までに土坑，溝を含めてすべての遺構調査を終了し，遺跡全体の完掘状況の写真撮影をした。続いて図面整理と撤収の準備に取りかかった。26日に発掘器材等を搬出した。30日までに安全対策と残務処理を完了し，すべての調査を終了した。

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

高須賀中台遺跡は，茨城県つくば市大字高須賀字中台491番地の1ほかに所在している。

遺跡の所在するつくば市は，茨城県の南西部に位置し，北は真壁郡明野町，同郡真壁町，新治郡八郷町に，東は新治郡新治村，土浦市に，南は牛久市，稲敷郡茎崎町，筑波郡伊奈町，同郡谷和原村に，西は水海道市，結城郡石下町，同郡千代川村，下妻市に接している。

つくば市の地形は，北は茨城県と福島県境にある八溝山から南に伸びる八溝山地の南端部に位置する筑波山を中心とする筑波山塊に接し，東側を東流して霞ヶ浦に流入する桜川と，西端を緩流して利根川に合流する小貝川に挟まれたつくば・稲敷台地上にあり，市街地の大部分がここに形成されている。この台地は常総台地の一部をなし，竜ヶ崎層と呼ばれる砂層・砂礫層が主体で，その上に板橋層または常総粘土層と呼ばれる灰白色粘土層（0.3～5.0m），その上に関東ローム層（0.5～2.5m）が堆積し，最上部は腐食土層となっている。標高は，河川流域に展開する沖積低地や浸食谷を除けばどこも20m前後を示しており，ほとんど高低差のない平坦な地形である。

当遺跡は，つくば市の西端に位置し，小貝川と西谷田川に挟まれた南北に細長い標高21mほどの台地上に位置している。低地は主に水田に利用されている。水田との比高は約6mである。調査前の現況は畑地であった。

参考文献

・大山年次，蜂須紀夫『茨城県　地学のガイド』1977年8月

・蜂須紀夫，大森昌衛『茨城の地質をめぐって』1979年9月

第2節　歴史的環境

高須賀中台遺跡を中心に「茨城県遺跡地図」[1]で周辺遺跡を概観すると，当遺跡周辺には東谷田川と西谷田川に挟まれた台地上と小貝川東岸の台地上，さらに小貝川・鬼怒川の西岸の台地上に数多くの遺跡が存在している。

これまでの遺跡分布調査の結果では，縄文時代の遺跡のみで旧石器時代の遺跡はまだ確認されていないが，平成7年度に茨城県教育財団が調査した鬼怒川西岸の台地上の三本松遺跡[2]〈31〉からスクレイパーが出土している。

縄文時代の遺跡は，山田遺跡〈3〉など中期から後期にかけての遺跡が中心である。山田遺跡からは縄文時代中期から後期にかけての土器や石器が広範囲にわたって散布し，大規模な集落跡の可能性が予想される。高須賀中台遺跡周辺では，ハナ遺跡〈21〉，院内山遺跡[3]〈22〉，神谷森遺跡〈23〉がある。院内山遺跡は縄文時代中期から後期にかけての遺跡である。神谷森遺跡は縄文時代中期から晩期にかけての遺跡で，阿玉台式期，加曽利E式期から安行Ⅲb式期に比定される土器が出土している。鬼怒川西岸の台地上には，西平遺跡〈30〉があり，遺跡内に地点貝塚が存在している。

弥生時代の遺跡として，確認されているものは少ない。高須賀中台遺跡周辺では，西谷田川左岸に高山遺跡〈5〉があり，弥生土器の甕が出土している。

この地域で一番多く確認されているのが，古墳時代の遺跡である。東谷田川と西谷田川にはさまれた台地上には，薬師遺跡〈6〉，榎内遺跡〈7〉，高山古墳群〈10〉，下河原崎古墳群〈11〉，榎内古墳群〈12〉，島名熊の山古墳群〈13〉，ツバタ遺跡〈15〉，小貝川東岸の台地上には熊の山遺跡〈4〉，中台東遺跡〈16〉，関の台遺跡〈20〉，新田古墳群〈27〉がある。特に，古墳は旧谷田部地区に多く，昭和34年に行われた茨城県教育委員会の分布調査によれば120基が確認されているが，地上に顕在化するものを対象としたことから，その実数にはるかに上回ることが予想される。古墳群の構成は，小形前方後円墳を中核とするものもあるが，小円墳で構成される例がきわめて多い。高山古墳群〈10〉は下河原崎地区の南端，東谷田川が形成した沖積地を臨んで三角形状に突出する平坦な台地の縁辺に沿って17基の円墳で構成する古墳群である。古墳群の北端にある1号墳は，径約35m，高さ約2.5mを有し，旧谷田部地区においては最大級の規模である。また，茨城県南部では珍しい横穴式石室を伴う2基の円墳も確認されている。鬼怒川西岸の台地上には，権現塚遺跡〈25〉，七塚古墳群〈26〉，中坪遺跡〈28〉，中坪古墳〈29〉，西坪貝塚〈30〉，三本松遺跡〈31〉がある。七塚古墳群[4]は，現在6基の円墳が遺存しているが，かつては10数基存在しており，その中には前方後円墳も含まれている。昭和21年度以降数次にわたって調査されている。埋葬施設は，粘土槨，壁に粘土を充塡した土壙，箱式石棺，小口積み竪穴系石室及び横穴式石室といろいろなタイプがあり，外表施設として埴輪をもつ古墳も存在している。副葬品には，鉄鏃，直刀，刀子，耳環，馬具，花形座金具，須恵器等がある。以上のような遺跡，古墳を見てみると，4世紀には集落が営まれていたが，古墳が出現するのは6世紀に入ってからとみられる。

奈良・平安時代の遺跡はこれまで確認されていなかったが，平成7年度から茨城県教育財団が調査した熊の山遺跡[5]〈24〉の他に中坪遺跡〈28〉がある。特に，熊の山遺跡は古墳時代から続く大規模集落で多数の遺構，遺物が出土している。

中世の遺跡[6]は，鬼怒川西岸の台地上にある三本松遺跡の他は，ほとんどが城館跡である。鎌倉幕府の成立後，小田氏の支配下となった近隣一帯には，多くの城が築かれた。特に当遺跡の南東方向の地に位置していたとされる高須賀城（山田城）跡〈9〉は建保二年（1214），豊田下総守治基の三男山田遠江守が築いたもので，多数の軍勢が守っていたと伝えられている。高須賀北方の約2ヘクタールの台地がその跡と推定され，土塁や堀の跡が今でも残っている。この周辺は起伏が多く，中正路，経塚，堂山，古行屋，東見塚などの地名があり，かつては大きな集落をなしていたことが推測される。高須賀城北方の丘を熊の(野)山城〈8〉と呼んでいるが，これは高須賀城よりも古い城で，高須賀の元屋敷と呼ばれている。熊の山には，いくつかの小規模な古墳があり，また畑の中からは弥生土器の破片などが出土することから，古い時代から人間が住んでいたと思われる。当初，熊の山に住んでいた人々が，やがて高須賀に移り，その後その一部が高良田に移ったと伝えられ，今でも高須賀を本田，高良田を新田と呼んでいる。

※　文中の〈 〉内の番号は，表1，第2図中の該当番号と同じである。

参考文献

(1)　茨城県教育庁文化課　『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会　1990年3月

(2)　茨城県教育財団「一般国道354号（水海道バイパス）道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　前原遺跡大門通遺跡　三本松遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第114集』　1996年6月

(3)　茨城県教育財団「一般県道土浦岩井線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　神谷森遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第66集』　1991年3月

(4)　菅井　勝　「茨城県水海道市羽生町七塚第1号墳の調査」『上智史学5』　1960年7月
長谷川　甕・中塚発夫　「茨城県水海道市羽生町七塚古墳群の調査」　1963年9月

吉田章一郎 「茨城県水海道市七塚古墳群」 『日本考古学年報13』 1965年3月

吉田章一郎 「茨城県水海道市羽生七塚第6号墳」 『日本考古学年報15』 1967年3月

(5) 茨城県教育財団「(仮称) 鳥名・福田坪地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ熊の山遺跡」

『茨城県教育財団文化財調査報告第133集』 1998年3月

茨城県教育財団「(仮称) 葛城地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 神田遺跡」

『茨城県教育財団文化財調査報告第134集』 1998年3月

(6) 谷田部の歴史編さん委員会 『谷田部の歴史』 谷田部町教育委員会 1975年9月

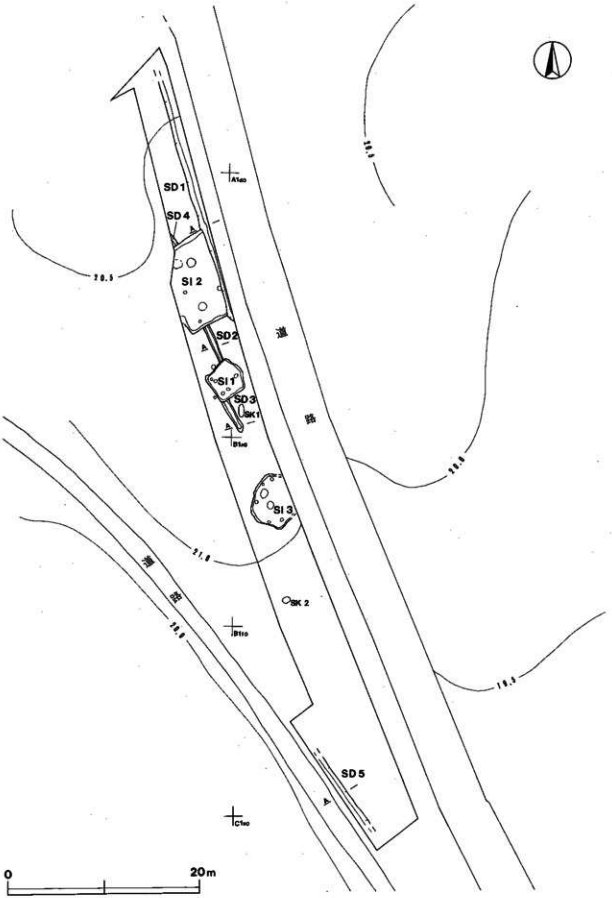
豊里町史編纂委員会 『豊里の歴史』 豊里町 1985年3月

水海道市史編さん委員会 『水海道市史 上巻』 1983年3月

表1 高須賀中台遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	県遺跡番号	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中近世以降	番号	遺跡名	県遺跡番号	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中近世以降
①	高須賀中台遺跡	2097		○			○		17	タカドロ遺跡	2914		○				
2	前野遺跡	2100		○					18	一町田遺跡	2915		○				
3	山田遺跡	2101		○					19	真瀬新田谷津遺跡	2916		○				
4	熊の山遺跡	2102				○			20	岡の台遺跡	2919				○		
5	高山遺跡	2103			○				21	ハナ遺跡	2921		○				
6	薬師遺跡	2105				○			22	院内山遺跡	2934		○				
7	榎内遺跡	2106				○			23	神谷森遺跡	2935		○				
8	熊の山城跡	2108						○	24	熊の山遺跡					○	○	
9	高須賀城跡	2109						○	25	権現塚遺跡	2356				○		
10	高山古墳群	2114				○			26	七塚古墳群	2358				○		
11	下河原崎古墳群	2115				○			27	新田古墳群	5840				○		
12	榎内古墳群	2119				○			28	中坪遺跡	6048		○		○	○	
13	島名熊の山古墳群	2120				○			29	中坪古墳	6049				○		
14	真瀬熊の山古墳群	2121		○					30	西坪貝塚	6050		○				
15	ツバタ遺跡	2906				○			31	三本松遺跡		○	○		○	○	
16	中台東遺跡	2909				○											

第２図　高須賀中台遺跡周辺遺跡分布図



第3図　高須賀中台遺跡遺構全体図

第３章　高須賀中台遺跡

第１節　遺跡の概要

高須賀中台遺跡は，つくば市の南西端に位置し，小貝川と西谷田川に挟まれた，南北に長い台地上に立地している。台地の標高は20～24ｍであり，小貝川・鬼怒川の流れる西側の低地との比高は約６ｍである。調査区域は，東西約5.5ｍ，南北約90ｍ，面積約491㎡で，現況は畑である。今回の調査は，平成９年９月の１か月間で行われた。

今回の調査では，縄文時代の住居跡１軒，古墳時代の住居跡２軒，土坑２基，溝５条が検出された。遺物は，遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に５箱出土した。出土遺物は，縄文時代前期の土器片，古墳時代前期の土師器片（器台，坩，壺，台付甕，甕，小形甕），石鏃等である。

第２節　基本層序

調査区の南部（B2f₂区）にテストピットを掘り，基本層序の観察を行った（第４図）。調査以前に表土除去をしたため，表土層は記載していない。

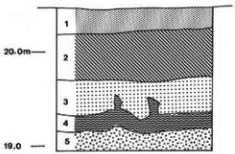
第１層は，厚さ20～30cmの褐色のソフトローム層で，粘性・締まりとも強い。

第２層は，厚さ45～55cmの褐色のソフトローム層で，１層よりも層が密で，やや色調も濃い。

第３層は，厚さ36～40cmの明褐色のハードローム層で，粘性・締まりとも強い。赤色スコリアを微量含む。

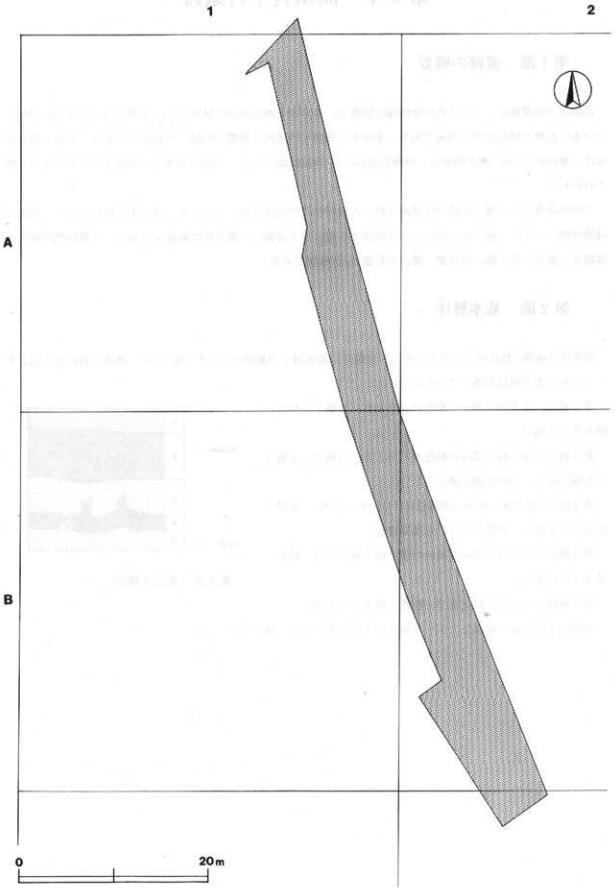
第４層は，厚さ14～17cmの褐色の層で粘土層を含む。粘性・締まりとも強い。

第５層は，灰白色の粘土層で，粘性・締まりとも強い。



第４図　基本土層図

遺構は１層上面で確認し，１・２層及び３層を掘り込んで構築されている。



第5図　高須賀中台遺跡調査区設定図

第3節　遺構と遺物

1　竪穴住居跡

今回の調査で検出された住居跡は，縄文時代前期の住居跡が1軒，古墳時代前期の住居跡が2軒である。以下，検出された住居跡の特徴や出土遺物について記載する。

第1号住居跡（第6図）

位置　調査区の北部，A1is区。

重複関係　本跡が，第2号溝の南部及び第3号溝の北部を掘り込んでいることから，両遺構よりも新しい。

規模と平面形　長軸3.45m，短軸3.20mの方形である。

主軸方向　N－37°－W

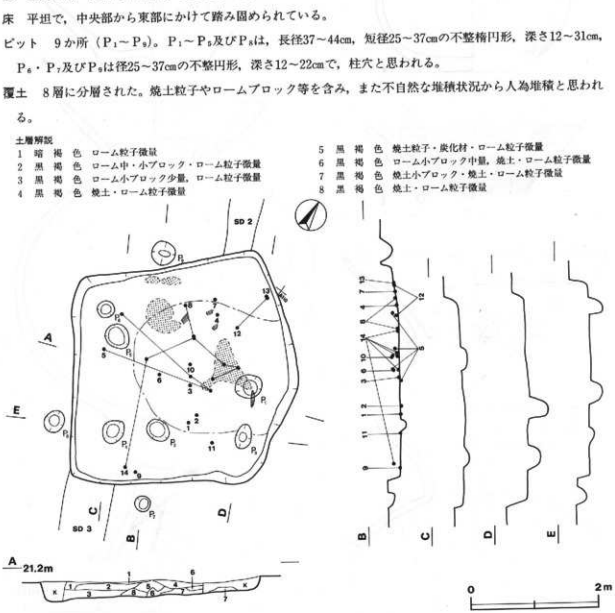
壁　壁高は15～34cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦で，中央部から東部にかけて踏み固められている。

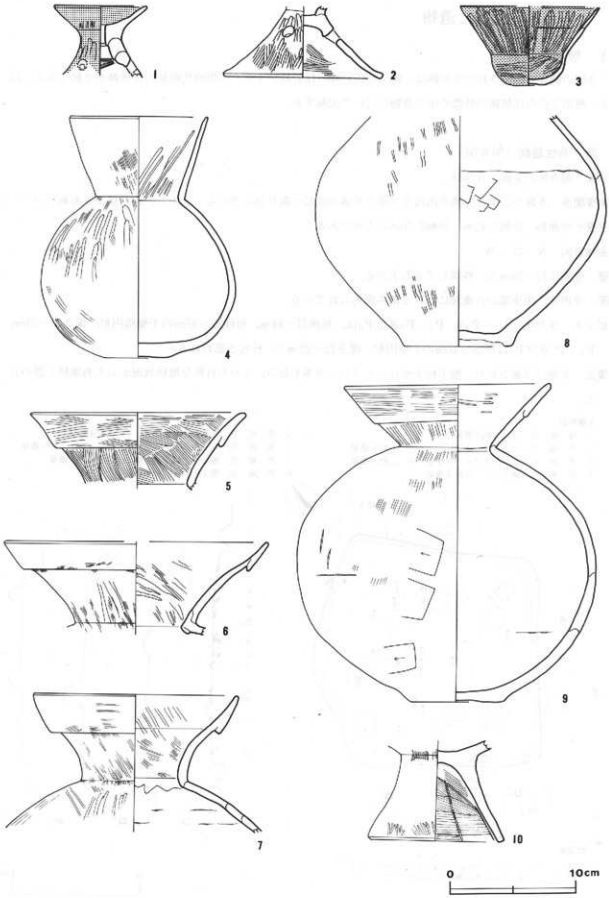
ピット　9か所（P_1～P_9）。P_1～P_9及びP_8は，長径37～44cm，短径25～37cmの不整楕円形，深さ12～31cm，P_8・P_7及びP_8は径25～37cmの不整円形，深さ12～22cmで，柱穴と思われる。

覆土　8層に分層された。焼土粒子やロームブロック等を含み，また不自然な堆積状況から人為堆積と思われる。

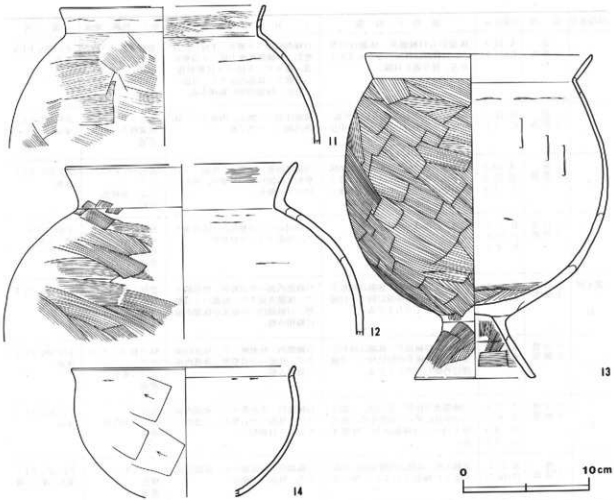
土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子微量
2　黒　褐　色　ローム中・小ブロック・ローム粒子微量
3　黒　褐　色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
4　黒　褐　色　焼土・ローム粒子微量
5　黒　褐　色　焼土粒子・炭化材・ローム粒子微量
6　黒　褐　色　ローム小ブロック中量，焼土・ローム粒子微量
7　黒　褐　色　焼土小ブロック・焼土・ローム粒子微量
8　黒　褐　色　焼土・ローム粒子微量



第6図　第1号住居跡実測図



第７図　第１号住居跡出土遺物実測図(1)



第８図　第１号住居跡出土遺物実測図(2)

第１号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第７図 1	器　台 土師器	A　7.4 B (5.5) E (3.0)	脚部一部欠損。器受部は内彎気味に外傾して立ち上がる。器受部の中央に貫通孔。脚部に３孔。	器受部内・外面横ナデ。外面の一部にハケ目整形痕。脚部外面ハケ目整形後、ヘラ磨き。内面ハケ目整形後ナデ。器受部内・外面及び脚部外面赤彩。	長石・雲母・スコリア 橙色 普通	P１60% PL６ 床面
2	器　台 土師器	B (5.6) D 12.4 E　5.4	脚部片。脚部はラッパ状に開く。脚部上位に３孔。	脚部外面ハケ目整形後、ヘラ磨き。 脚部内面ハケ目整形後、ナデ。	スコリア 橙色 普通	P２40% PL６ 床面
3	坩 土師器	A (11.2) B　6.2 C　2.1	体部及び口縁部一部欠損。中央部がやや窪んだ平底。体部は球形を呈し、口縁部は直線的に外傾する。	口縁部内・外面横方向のヘラ磨き。体部は横方向のヘラ磨き。口縁部及び体部内・外面赤彩。	スコリア 明赤褐色 普通	P３50% PL６ 床面
4	坩 土師器	A 10.8 B 19.1 C　5.0	口縁部一部欠損。底部は突出気味の平底。体部は球形を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内面縦方向のヘラ磨き。外面ヘラ磨き。体部外面ハケ目整形後、ナデ。	長石・石英・スコリア にぶい黄橙色 普通	P４90% PL６ 床面
5	壺 土師器	A 16.8 B (6.0)	口縁部片。口縁部は直線的に外傾して立ち上がる。折り返し口縁。	口縁部内・外面ハケ目整形。	長石・石英 にぶい橙色 普通	P５10% PL６ 床面・覆土下層
6	壺 土師器	A (20.5) B (7.3)	口縁部片。口縁部は緩く外反する。折り返し口縁。	口縁部内・外面ヘラ磨き。口縁部内・外面の一部にハケ目整形痕。	雲母・スコリア 橙色 普通	P６　5% 覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
7	壺 土師器	A 16.2 B (10.8)	体部から口縁部片。体部は内彎し，口縁部は外反しながら立ち上がる。折り返し口縁。	口縁部内面ヘラ磨き，下位ハケ目整形。口縁部外面上位ハケ目整形後，横ナデ。下位ハケ目整形後，ヘラ磨き。体部内面ナデ，外面ヘラ磨き。体部内面に輪積み痕。	長石・スコリア によい橙色 普通	P 7 20% PL 6 床面
8	壺 土師器	B (18.2) C 8.4	底部から体部片。突出した平底。体部は球形を呈し，最大径を中位に持つ。	体部外面ヘラ磨き，内面ナデ。体部内面にヘラ当て痕。	スコリア 浅黄橙色 普通	P 8 60% PL 6 床面
9	壺 土師器	A 16.3 B 25.3 C 7.0	口縁部一部欠損。底部は突出気味の平底。体部は球形を呈し，最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。折り返し口縁。	口縁部内面ヘラ磨き，外面ハケ目整形。体部外面ヘラ削り，外面上位ハケ目整形。	長石・石英・スコリア によい黄橙色 良好	P 9 95% PL 6 床面
10	台付甕 土師器	B (8.0) D 10.6 E 6.8	台部。台部はハの字状に開く。	台部内面ハケ目整形。台部外面ナデ，外面下位ハケ目整形。	長石・雲母・スコリア 橙色 普通	P10 10% 覆土下層
第8図 11	台付甕 土師器	A (16.2) B (11.0)	体部から口縁部片。体部は球形を呈し，最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内面ハケ目整形，外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ハケ目整形。口縁部内・外面及び体部内面に輪積み痕。	雲母・砂粒 橙色 普通	P14 10% PL 6 床面
12	台付甕 土師器	A (18.3) B (13.8)	体部から口縁部片。体部は球形を呈し，最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ハケ目整形。体部内面に輪積み痕。	粘土粒子・スコリア によい褐色 普通	P13 20% PL 7 床面
13	台付甕 土師器	A 17.8 B 26.0 D 9.5 E 4.6	口縁部及び体部一部欠損。台部はハの字状に開く。体部中位に最大径を持つ。口縁部は短く外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ハケ目整形。台部内・外面ハケ目整形。	長石 によい黄橙色 普通	P11 80% PL 7 床面
14	甕 土師器	A 17.7 B (10.3)	底部欠損。体部は内彎気味に外傾する。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ヘラ削り。	スコリア 橙色 普通	P12 50% PL 7 床面・覆土下層

遺物　中央部の床面及び覆土下層を中心にして土師器片791点が出土しているが，破片が多い。土師器片の他に床面から炭化材も出土した。第7図1・2の土師器器台と3の土師器坩は中央部，4の土師器坩は北部のいずれも床面からそれぞれ出土している。5の土師器壺は，中央部と西部の床面あるいは覆土下層から出土した破片が接合した。6の土師器壺は中央部の覆土下層から，7・8の土師器壺は北部の床面から，9の土師器壺は南部壁際の床面から，10の土師器台付甕は中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。第8図11の土師器台付甕は東部床面から，12の土師器台付甕は北部の床面から，13の土師器台付甕は北部壁際の床面からそれぞれ出土している。14の土師器甕は中央部と南部の床面及び覆土下層から出土した破片が接合した。

所見　本跡は，床面から焼土や炭化物が検出されており，焼失家屋の可能性が高い。また，遺物は土師器の器台，坩，台付甕等が出土しているが，破片の状態からみて，本跡に投棄されたものと思われる。本跡の時期は，出土遺物から古墳時代前期と思われる。

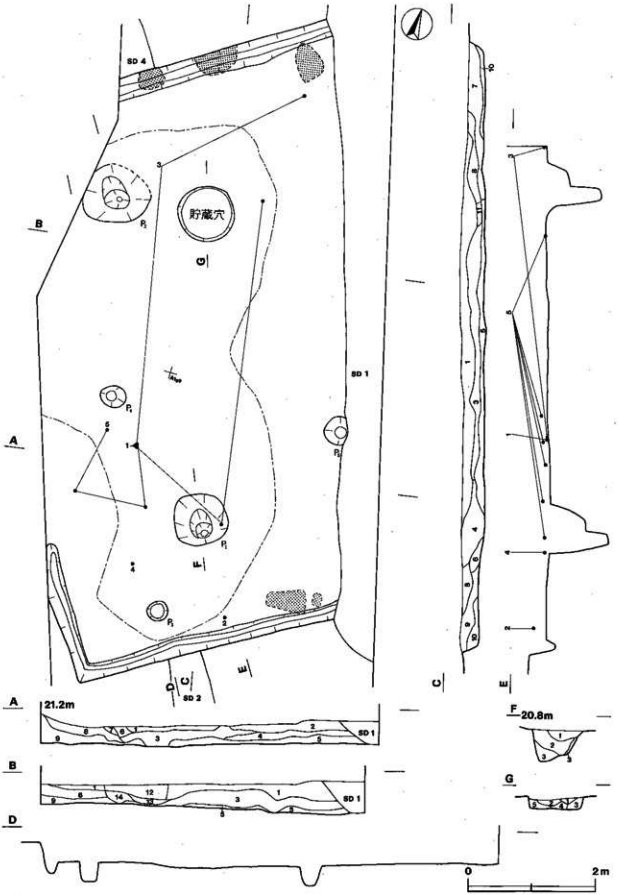
第2号住居跡（第9図）

位置　調査区の北部，A1fg区。

重複関係　本跡が，第2・4号溝を掘り込んでおり，また，第1号溝に掘り込まれていることから，第2・4号溝よりも新しく，第1号溝よりも古い。

規模と平面形　長軸9.20m，短軸（5.00）mで長方形と推定される。

主軸方向　N－30°－W



第9図　第2号住居跡実測図

壁　壁高は21～26cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　南壁下と北壁下及び西壁下の一部で検出した。上幅約32cm，下幅約９cm，深さ約15cmで，断面形は逆台形である。

床　平坦で，中央部から西部にかけて踏み固められている。

ピット　５か所（P_1～P_5）。P_1・P_2は，長径83～103cm，短径81～92cmの不整楕円形，深さ85～95cmで，配置や規模から主柱穴と思われる。P_3・P_4は径35cmの不整円形，深さ33～35cm，P_5は東部が第１号溝に掘り込まれているため，規模や平面形は明確でないが，径〔48〕cm，深さ20cmの不整円形とみられる。P_3～P_5は性格不明である。

Ｐ１土層解説
1　黒　　色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム中・小ブロック少量
3　暗　褐　色　ローム中・小ブロック・ローム粒子中量

貯蔵穴　北部に付設され，径90cmの不整円形で，深さは23cm，断面形は逆台形である。各層ともロームブロックを含んでおり，また，不自然な堆積状況から人為堆積と思われる。

貯蔵穴土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
2　黒　褐　色　ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
3　黒　褐　色　ローム粒子中量，ローム大・中・小ブロック少量
4　黒　褐　色　ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
5　黒　褐　色　ローム中ブロック・ローム粒子少量

覆土　14層からなり，不自然な堆積状況から，人為堆積と思われる。

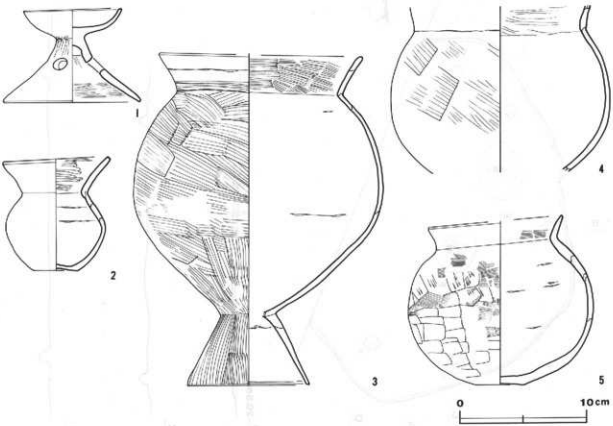
土層解説
1　暗　褐　色　焼土粒子中量，ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
2　暗　褐　色　焼土粒子中量，ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
3　極暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
4　黒　褐　色　焼土粒子・ローム中ブロック・ローム粒子微量
5　黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム大ブロック微量
6　黒　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
7　黒　褐　色　ローム粒子中量
8　黒　褐　色　ローム大ブロック・ローム粒子少量
9　暗　褐　色　ローム大ブロック中量，ローム中ブロック・ローム粒子少量
10　暗　褐　色　ローム小ブロック少量，ローム粒子中量
11　褐　　色　ローム大ブロック多量
12　極暗褐色　ローム粒子少量，炭化粒子・ローム小ブロック少量
13　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム大・小ブロック少量
14　黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子微量

遺物　土師器片798点が，遺構全体に散在した状態で出土している。第10図１の土師器台は南部の床面から，２の土師器坩は南部壁際の覆土上層から，３の土師器台付甕は北部の覆土下層と南部の床面から出土したものが接合した。４の土師器台付甕は南部の覆土下層から出土した。５の土師器小形甕は北部の床面と南部の覆土下層から出土した破片が接合した。

所見　本跡の時期は，出土遺物から古墳時代前期と思われる。

第２号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第10図 1	器　台 土師器	A 7.6 B 7.4 D 10.7 E 5.1	脚部一部欠損。脚部はラッパ状に開く。器受部は内彎気味に外傾して立ち上がる。脚部上位に３孔。	器受部内・外面ナデ。脚部内面ハケ目整形，外面ヘラ磨き。	長石・雲母・粘土粒子 橙色 普通	P15 95% PL7 床面
2	坩 土師器	A 8.3 B 9.0 C 3.6	口縁部一部欠損。平底。体部は球形を呈し，最大径を中位に持つ。口縁部は外反しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。口縁部内面にハケ目整形痕。体部内・外面ナデ。体部内面に輪積み痕。	スコリア にぶい橙色 良好	P16 95% PL7 覆土上層



第10図　第２号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
3	台付甕 土師器	A〔15.9〕 B 26.4 D 9.7 E 5.7	口縁部及び体部一部欠損。脚部はハの字状に開く。体部は球形を呈し，最大径を中位に持つ。口縁部は短く外傾して立ち上がる。	口縁部内面ハケ目整形，外面横ナデ。体部ナデ，外面ハケ目整形。脚部内面ナデ，外面ハケ目整形。	粘土粒子・スコリア 橙色 普通	P17 80% PL7 床面・覆土下層
4	台付甕 土師器	B〔13.1〕	台部及び体部一部欠損。体部は球形を呈し，最大径を中位に持つ。口縁部は短く外傾して立ち上がる。	口縁部内面ハケ目整形，外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ハケ目整形。	粘土粒子・スコリア にぶい赤褐色 普通	P19 20% PL7 覆土下層
5	小形甕 土師器	A〔10.5〕 B 13.4 C 4.0	口縁部及び体部一部欠損。平底。体部は球形を呈し，最大径を中位に持つ。口縁部は短く外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。体部外面ハケ目整形後，ヘラ削り。	雲母 橙色 普通	P18 70% PL7 床面・覆土下層

第３号住居跡（第11図）

位置　調査区の南部，B2b₁区。

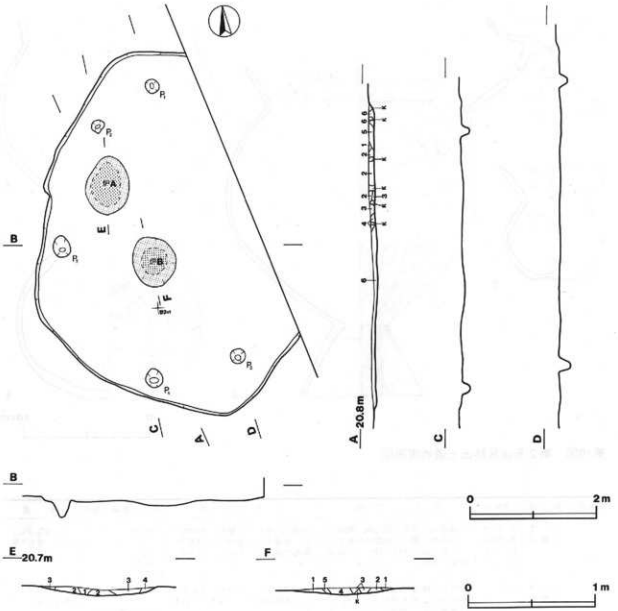
規模と平面形　長軸5.08m，短軸（4.32）mで長方形と推定される。

主軸方向　N－26°－E

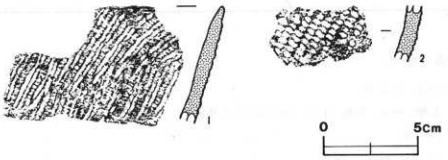
壁　壁高は４～10cmで，緩やかに外傾して立ち上がる。

床　平坦で，全体的に軟らかく，踏み固めた部分は見られない。

ピット　５か所（P_1～P_5）。P_1～P_5は，長径21～34cm，短径24～26cmの不整楕円形，深さ16～30cmで，主柱穴と思われる。



第11図　第3号住居跡実測図



第12図　第3号住居跡出土遺物拓影図

炉　中央部から西寄りに２か所（炉Ａ・Ｂ）検出された。炉Ａ・炉Ｂはほぼ南北に並び，北側が炉Ａ，南側が炉Ｂである。炉Ａは，長径83cm，短径69cmの楕円形で，床面を８cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉Ｂは，長径80cm，短径67cmの楕円形で，炉Ａと同じく床面を６cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は，どちらも焼けて赤変している。

炉Ａ土層解説
1　暗　褐　色　焼土・ローム粒子微量
2　暗　褐　色　焼土小ブロック・炭化・ローム粒子微量
3　暗　褐　色　ローム小ブロック微量
4　暗　褐　色　焼土小ブロック・炭化物微量

炉Ｂ土層解説
1　黒　褐　色　ローム小ブロック微量
2　暗　褐　色　焼土・炭化・ローム粒子微量
3　暗　褐　色　ローム小ブロック微量
4　暗　褐　色　焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック微量
5　暗　褐　色　焼土粒子微量

覆土　６層からなる，自然堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　焼土・ローム粒子微量
2　暗赤褐色　焼土小ブロック・ローム粒子中量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量
4　黒　褐　色　ローム粒子少量
5　黒　褐　色　焼土・ローム粒子少量
6　褐　　色　ローム粒子多量

遺物　縄文土器片15点が出土しているが，破片が多い。第12図１・２は縄文土器片の拓影図である。１は口縁部片で，口唇部直下からＲの無節縄文が施されている。２は胴部片でＬＲの単節縄文が施されている。

所見　本跡は，出土遺物から縄文時代前期（黒浜式期）の住居跡である。

表２　高須賀中台遺跡住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m)(長軸×短軸)	壁高(cm)	床面	内部施設 壁溝	内部施設 主柱穴	内部施設 貯蔵穴	内部施設 ピット	内部施設 出入口	炉・竈	覆土	出土遺物	備考 重複関係(古→新)
1	A1ia	N－37°－W	方形	3.45×3.20	15～34	平坦				9			人為	土師器片（器台9A，壺16A，台付甕6，甕68Z），炭化材	SD－2・3→本跡
2	A1ib	N－30°－W	(長方形)	9.20×(5.00)	21～26	平坦	一部	2	1	3			人為	土師器片（台付甕57，甕74A，埋1）	SD－2・4→本跡→SD－1
3	B2ia	N－26°－E	(長方形)	5.08×(4.32)	4～10	平坦		5				炉2	自然	縄文土器片15	

２　溝

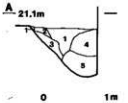
今回の調査で溝５条を検出した。調査区が南北に細長いため，ほとんど調査区外にのびている。また，性格等についても不明な点が多い。

第１号溝（遺構全体図・第13図）

位置　調査区の北部，A1as～A1go区。

重複関係　本跡が，第２号住居跡を掘り込んでいることから，第２号住居跡よりも新しい。

規模と形状　北部及び南東部が調査区外に延びているため検出部分は（26.5）mである。上幅（107）cm，下幅（24）cm，深さ80cmで，断面は浅いＵ字形である。



第13図　第１号溝実測図

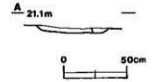
方向　A1as区から南東に直線的に延びるが，A1go区からは調査区外になるため，全体の形状は不明である。

覆土　５層からなり，ロームブロック等を含み，また不自然な堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説
1 黒 褐 色 ローム粒子少量
2 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
3 黒 褐 色 ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・ローム粒子少量
4 極暗褐色 粘土中ブロック少量，ローム中・小ブロック微量
5 黒 褐 色 ローム粒子少量，ローム大・中ブロック微量

遺物　土師器片19点が出土しているが，いずれも破片である。

所見　本跡の時期は，比定できる遺物がなく不明であるが，第２号住居跡（古墳時代前期）を掘り込んでいることから古墳時代前期以降のものと思われる。



第14図　第２号溝実測図

第２号溝（遺構全体図・第14図）

位置　調査区の北部，A1h9区。

重複関係　本跡は，第１号住居跡及び第２号住居跡に掘り込まれていることから，両遺構よりも古い。

規模と形状　北部を第２号住居跡に，南部を第１号住居跡に掘り込まれているため，検出された部分だけで（4.10）ｍである。上幅57cm，下幅47cm，深さ6cmで，断面は浅いＵ字形である。

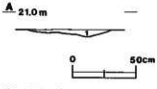
方向　A1h9区内で検出され，北西から南東にほぼ直線的に延びる。

覆土　単一層で，自然堆積である。

土層解説
1 黒 褐 色 ローム中・小ブロック少量

遺物　出土していない。

所見　時期を限定できる遺物はないが，本跡が第１号住居跡（古墳時代前期）及び第２号住居跡に掘り込まれているため，古墳時代前期以前のものと思われる。



第15図　第３号溝実測図

第３号溝（遺構全体図・第15図）

位置　調査区の中央部A1j9～A1j6区。

重複関係　本跡は，北部を第１号住居跡に掘り込まれていることから，第１号住居跡よりも古い。

規模と平面形　第１号住居跡に掘り込まれているため，検出された部分の全長は（3.8）ｍである。上幅65cm，下幅35cm，深さ6cmで，断面は浅いＵ字形である。

方向　A1j6区から北西方向にほぼ直線的に延びるが，第１号住居跡に掘り込まれているため，全体の形状はつかめなかった。

覆土　単一層で，自然堆積である。

土層解説
1 黒 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物　土師器片１点が出土している。

所見　時期を限定できる遺物はないが，本跡が第１号住居跡（古墳時代前期）に掘り込まれているため，古墳時代前期以前のものと思われる。

第４号溝（遺構全体図）

位置　調査区の北部Ａ1es区。

重複関係　本跡は，第２号住居跡に掘り込まれているため，第２号住居跡よりも古い。

規模と平面形　西部が調査区外のため，一部分しか検出できなかった。全長（1.3）ｍ，上幅（60）cm，下幅（30）cmで，深さ，断面形とも不明である。

方向　Ａ1esで，北西方向に延びる。

遺物　出土していない。

所見　本跡の時期は，遺物が出土しておらず不明であるが，第２号住居跡に掘り込まれているため，古墳時代前期以前のものと思われる。

第５号溝（遺構全体図・第16図）

位置　調査区の南部Ｂ2i2～Ｃ2as区。

規模と形状　検出部分は全長（9.0）ｍである。上幅（83）cm，下幅（47）cm，深さ23cmで，断面は浅いＵ字形である。

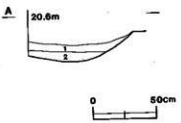
方向　Ｂ2i2区から南東に直線的に延びている。

覆土　２層からなり，自然堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム小ブロック微量
2　黒　褐　色　ローム粒子微量

遺物　出土していない。

所見　時期は，遺物がなく不明である。



第16図　第５号溝実測図

表３　高須賀中台遺跡溝一覧表

溝番号	位置	方向	形状	規模 確認長(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)	断面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係 新旧関係(古→新)
1	A1as～A1gs	N－18°－W	直線	(26.5)	(107)	(24)	80		平坦	人為	土師器片19	ＳＩ-2→本跡
2	A1hs	N－25°－W	直線	(4.1)	57	47	6		平坦	自然		本跡→ＳＩ-1・2
3	A1js～A1js	N－28°－W	直線	(3.8)	65	35	6		平坦	自然	土師器片１	本跡→ＳＩ-1
4	A1es	N－30°－W	直線	(1.3)	(60)	(30)	不明	不明	不明	不明		本跡→ＳＩ-2
5	B2i2～C2as	N－33°－W	直線	(9.0)	(83)	(47)	23		平坦	自然		

３　土坑

調査区の中央部と南部から２基の土坑を検出したが，いずれも出土遺物は少ない。それぞれの特徴と遺物に付いて記載する。

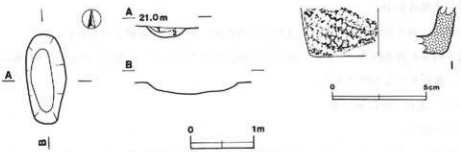
第１号土坑（第17図）

位置　調査区の中央部，Ａ1jo区。

規模と平面形　長径0.80ｍ，短径0.63ｍの不整楕円形で，深さ12～13cmである。

長径方向　Ｎ－４°－Ｗ

壁面　緩やかに外傾して立ち上がる。



第17図　第1号土坑・出土遺物実測図

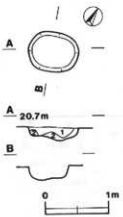
底面　皿状である。

覆土　2層からなり，自然堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム小ブロック少量
2　暗　褐　色　ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量

遺物　縄文土器片が1点出土している。第17図1は縄文土器の底部から胴部下半にかけての拓影図で，RLの単節縄文が施されている。

所見　本跡からは縄文土器片が1点出土しているが，覆土上層からの出土で，他に遺物もなく時期を限定することは難しい。



第18図　第2号土坑実測図

第2号土坑（第18図）

位置　調査区の南部，B2e1区。

規模と平面形　長径0.78m，短径0.62mの不整楕円形で，深さ18cmである。

長径方向　N－60°－E

壁面　垂直に立ち上がる。

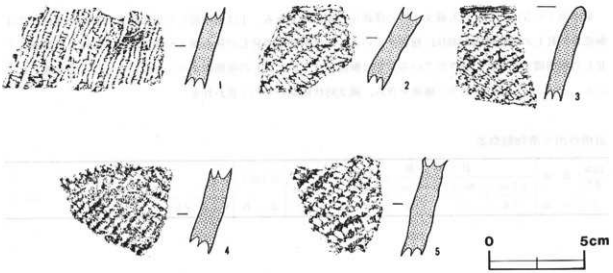
底面　皿状である。

覆土　2層からなり，自然堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量

遺物　縄文土器片34点が覆土中から出土しているが，ほとんどが小破片である。第19図1～5は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1は胴部片でRLの単節縄文，2も胴部片でLRの単節縄文が施されている。3は口縁部片で，口唇部直下からRLの単節縄文が施されている。4は胴部片でLRの単節縄文が羽状に施されている。5も胴部片でRLの単節縄文が施されている。いずれも縄文時代前期（黒浜式期）のものである。

所見　本跡からは，縄文時代前期の土器片が出土しており，縄文時代前期（黒浜式期）の土坑と思われる。



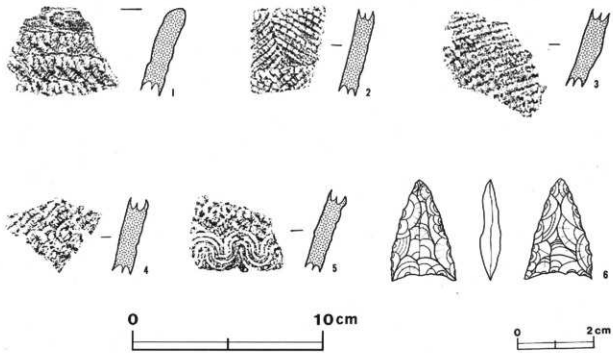
第19図　第２号土坑・出土遺物拓影図

表４　高須賀中台遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係 新旧関係(古→新)
1	A1j9	N－4°－W	楕円形	0.80×0.63	12～13	外傾	皿状	自然	縄文土器片１	
2	B2c7	N－60°－E	楕円形	0.78×0.62	18	垂直	皿状	自然	縄文土器片34	

４　遺構外出土遺物

当遺跡からは，縄文時代から古墳時代にかけて遺物が出土しているが，小破片が多く掲載できないものが多い。ここでは，比較的遺存状態の良好な縄文時代の土器片と石鏃１点を掲載する。



第20図　遺構外出土遺物実測図

第20図１～５は，いずれも縄文土器の深鉢片の拓影図である。１は口縁部片で単節縄文ＬＲが施され，２は胴部片でＲＬの単節縄文が羽状に施されている。３は胴部片でＲＬの単節縄文が施され，４は同じく胴部片でＲＬの単節縄文が羽状に施されている。５は胴部片で上位にＲＬの単節縄文が，下位にコンパス文が施されている。１～５はいずれも胎土に繊維を含み，縄文時代前期のものと思われる。

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
6	石鏃	2.6	1.7	0.5	2.0	チャート	表採	Q1　PL8

第4節　ま　と　め

今回の調査では，縄文時代の住居跡が1軒，古墳時代の住居跡が2軒検出されている。溝，土坑も検出されたが，土坑1基を除き，時期は不明である。また，溝については調査区が南北に細長い形状のため調査区外に延びているものが多く，性格等については不明である。ここでは，時代ごとに住居跡の概要を述べ，まとめとしたい。

縄文時代

本期にあたるのは第3号住居跡で，縄文時代前期（黒浜式期）のものと考えられる。本跡は調査区の南部で検出されたが，北東部が調査区外のため全体の様子はつかめなかった。住居跡の掘り込みは浅く，床面は軟らかく，締まりもなかった。平面形は，ほぼ長方形と考えられる。中央部から西寄りに炉が2か所（炉A・B）検出されている。どちらも焼けて赤変していたが，炉Bの方が覆土の締まりが強かった。また，壁に沿って回るようにピットが5か所検出され，深さは16～30cmで比較的掘り方はしっかりていた。遺物はいずれも縄文土器片で破片だったが，掲載できるものはできるだけ取り上げた。胎土に繊維を含む縄文時代前期の黒浜式期に比定される土器で，単節縄文が施文されているものがほとんどであった。

古墳時代

本期にあたるのは，第1・2号住居跡で古墳時代前期（五領期）のものと考えられる。第1号住居跡は，調査区の中央部からやや北寄りから検出され，調査区が狭いながらも，遺構のほぼ全体を調査することができた。平面形はほぼ方形で，規模は一辺が3.3m前後である。主軸方向はN－37°－Wであるが北方向を意識して構築したものかどうかは明らかでない。ピットは9か所検出され，その内3か所は壁外で検出された。壁近くであることと，掘り方もしっかりしていたので本跡に伴うピットと判断した。炉は，検出されなかった。出土遺物は器台，坩，壺，台付甕，甕等が床面及び覆土下層を中心にして出土している。特に，器台，壺，台付甕が多く出土し，現存率の高いものもあった。器台は器受部に単孔。脚部に3孔を有し，赤彩されたものもあった。台付甕は体部，台部がハケ目整形されたものが多かった。壺は口縁部片が多かったが，折り返し口縁で，台付甕同様にハケ目整形されたものが多かった。

第2号住居跡は，調査区の北部で検出され，遺構の東部及び西部が調査区外のため，全体を調査することはできなかった。規模は検出部分で長軸9.20m，短軸（5.00）mで第1号住居跡に比べてかなり規模が大きい。北部から貯蔵穴が検出されたが，遺物等は出土しなかった。ピットは5か所検出されたが，P_1とP_2は掘り込みもしっかりしており，規模，深さ，大きさともに類似しており主柱穴とした。主軸方向はN－30°－Wと考えられ，第1号住居跡とほぼ同じと思われる。炉等は検出されなかった。遺物は，土師器器台，坩，台付甕，小形甕等が床面及び覆土下層を中心にして出土している。第1号住居跡から出土した壺は出土していない。遺物の器形，手法の特徴等は第1号住居跡とほぼ同じであった。

茨城県教育財団が，平成元年に調査した神谷森遺跡からは，古墳時代前期の住居跡が28軒検出されている。また，鬼怒川を挟んだ対岸の水海道市前原遺跡からは，本遺跡に先行する3世紀末葉と思われる住居跡が検出されている。神谷森遺跡は本跡から北に約1kmのところにあり，本跡とほぼ同時期同一の台地上に集落が存在していたものと思われる。これらの調査結果から，古墳時代前期，この台地上にある程度の規模とまとまりを持った集落がいくつか存在した可能性が高い。

参考文献

・茨城県教育財団　「一般県道土浦岩井線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　神谷森遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第66集』1991年3月

・茨城県教育財団　「一般国道354号（水海道バイパス）道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　前原遺跡　大門通遺跡　三本松遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第114集』1996年6月

写 真 図 版

北部完掘状況

第１号住居跡

第１号住居跡遺物出土状況

第１号住居跡遺物出土状況

第１号住居跡遺物出土状況

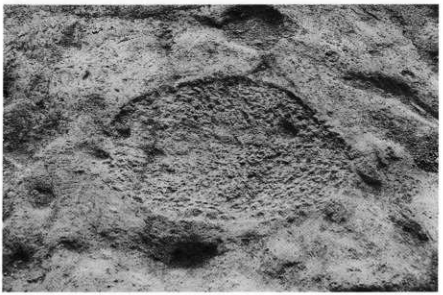
第２号住居跡

第２号住居跡遺物出土状況

第２号住居跡遺物出土状況

第２号住居跡遺物出土状況

第３号住居跡遺物出土状況



第３号住居跡炉A

第３号住居跡炉B

第１号溝

第１号土坑

第２号土坑

7−1

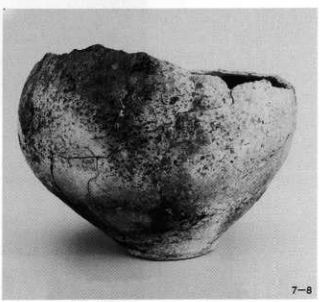
7−2

7−3

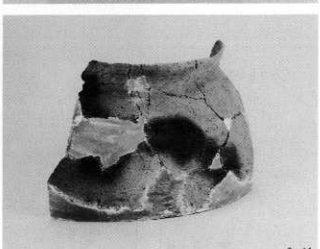
7−4

7−5

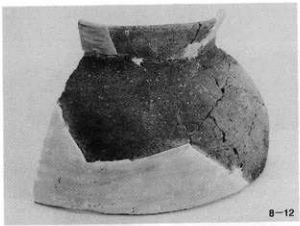
7−7


7−8

7−9


8−11

第１号住居跡出土遺物


8−12

8−13

10−1

8−14

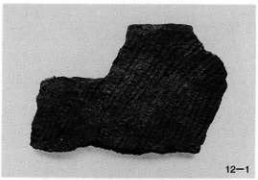
10−2

10−4

10−3

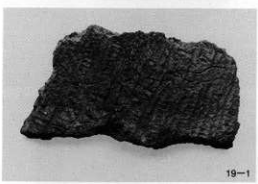
10−5

第１・２号住居跡出土遺物


12−1

12−2

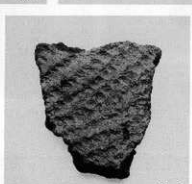
17−1


19−1

19−2

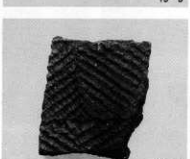
19−3

19−4


19−5

20−3

20−1


20−2

20−4

20−5

20−6

第３号住居跡・第１・２号土坑・遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第142集

一般県道赤浜谷田部線県単道路改良
事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

高須賀中台遺跡

平成10（1998）年11月25日印刷
平成10（1998）年11月30日発行

発行　財団法人　茨城県教育財団
水戸市見和1丁目356番地の2
TEL　029－225－6587

印刷　㈱きど印刷所
水戸市見川町2558-21
TEL　029－241－2525